

# メーサイ病院の2人が視察を終え帰国

タイ国立メーサイ病院から日本の医療事情を視察に来日していた管理部門のワラチャボン・マノペアウさん（愛称・アート）と薬剤師のスチャダ・キッティパニャウオラクンさん（愛称・ダー）の2人が、約1カ月の視察を終え、7月31日に帰国します。

2人は、約1カ月の期間中、城西病院の各部署を回ったほか、城西病院の門前薬局、ひまわり調剤薬局や達生堂グループの介護老人保健施設「すばる」、通所リハビリセンター「茶釜の湯」などを視察しました。

アートさんは、城西病院もかかわったGMSメディカル・トレーニングセンターのサブコーディネーターを務めました。この事業は、カンボジア、ミャンマー、ラオス、ベトナムの医療関係者を研修生としてメーサイ病院に招き、日本から城西病院の医師や看護師、検査技師などを講師として、エイズ、マラリア、結核の感染症を防ぐための教育を行うもので、2006年度から08年度までIIFBが取り組みました。アートさんは「このプロジェクトで、城西病院の人と会い、日本がどんな国なのか想像していました。今回、初めて希望がかない、日本に来ることができました」とし、「日本は患者さんを大事にしている。そして技術や機械が進み、一人一人の職員がなんでもできる。メーサイ病院のスタッフに伝えたい」と話していました。

メーサイ病院はアジア10か国で作るAEC（アジア・エコノミ・コミュニケーション）の中で、5年後に今の90床の病院から120床の病院に規模を拡大し、よりアジアの中での中核的病院になるべく、病院の建設計画を進めているといい、「日本のシステムを参考に、よりよい病院にしていきたい」と話していました。

タイでは薬局の果たす役割が大きく、多くの人は薬局で薬を買って



ダーさん



アートさん

病気を治すことが多く、薬の価格も安く、国から30パーツの補助が出ます。その薬で病気が治らなかったり、重い疾病にかかった時に病院に行くといひます。ダーさんは、「日本の病院や調剤薬局では、分包器で患者さんが飲みやすいように薬を出すシステムがとても印象的でした」と語ります。「日本のシステムを参考に、メーサイ病院もより便利なシステムに変えていきたい」と話します。

タイでは、医師や看護師が病院に勤務しながら自分のクリニックを開いたり、薬剤師が薬局を開いたりしています。ダーさんは「メーサイ病院でいろんな病気を勉強していきたい。そして、いつかは自分の薬局も開きたい」と話していました。

2017年7月24日

© Tasseido group